

# 保育者養成課程での音楽的な経験と 保育者としての音楽表現の関係性

## Relationship between Musical Experience and Musical Expression in Childcare Worker Training

川見 夕貴 峯村 恒平

(Yuki KAWAMI Kohei MINEMURA)

### Abstract :

This study examines the process of enhancing musical expression among childcare workers, with a particular focus on the connection between musical experiences gained during childcare worker training courses, previous lessons or club activities, and the challenges faced in musical expression upon becoming a childcare worker. The study reveals that during childcare worker training courses, it is important to (1) assess and address factors contributing to feelings of inadequacy in piano instruction, regardless of performance skill, and (2) recognize the significance of expression in singing or performing in front of others, as well as receiving instruction in musical or singing performance, including ensemble training.

キーワード：保育者の表現、音楽表現、音楽的な経験

Keywords : expression of teacher / musical expression / musical experience

### 1. 保育者に必要な音楽性

保育者は、自身の音楽的な表現が、子どもが楽しむことや音楽活動に興味、関心をもつきっかけ、意欲になるということを意識して、日常的に音楽的な表現を行っている（川見・峯村、2023）。田崎（2015）は、保育者には発信的能力<sup>1)</sup>のみならず、応答的能力<sup>2)</sup>が重要であるとし、「ピアノを弾く」「歌を歌う」「楽器を演奏する」等の保育者自身で完結するような音楽的能力ではなく、子どもとの関係において、その場の状況に応じて発揮できるような音楽的能力が求められていると述べている。そして、保育者の「音による応答性」について検討するために、保育との共通性を導き出しながら、「クリニカ

ル・ミュージシャンシップ」を援用して考察し、保育者に必要な音楽性として<sup>3)</sup>、(1)「子どもの状況とニーズを把握する力」、(2)「子どもの表現を直感的に受け取る力」、(3)「子どもの表現に、音楽的に反応する力」、(4)「子どもの表現に反応するための音楽的資源」、(5)「子どもの表現に方向性をもたせる力」、(6)「子どもの表現を広げられる音楽的アイディア」の6つを示している<sup>4)</sup>。(1)～(3)は、音楽的な知識や技能、ノウハウを習得しただけでは獲得できないものであり、全ての子どもと音楽の間に身を置き、その関わりに敏感になって反応する応答的能力であるとし、この3つ能力を生かすために必要である(4)～(6)は、個人的な学習に

よって獲得が可能で、発信的能力の基盤となるものであるとしている（田崎, 2015, pp.102-108）。

保育者養成校においては、(4)「子どもの表現に反応するための音楽的資源」に当たる音楽的な基礎知識、音楽のレパートリー、ピアノ・歌・楽器の基本的な演奏能力が代表的に指導されてきた（田崎, 2015, pp.106-107）。これを踏まえ、田崎（2015）は、6つの音楽性は保育者養成校において、どの程度修得可能かについて検討しており、自らの実践を通して、(4)「子どもの表現に反応するための音楽的資源」の探求、表現の工夫をする上での(6)「音楽的アイデア」の創出、(2)「その場の状況（子どもの表現）を直感的に感じ取る力」やそれに対して、(3)「音楽的に反応する力」の育成につながったとしている。では、実際には、多くの保育者は養成課程において(1)～(6)に関する音楽的な経験<sup>5)</sup>をどの程度して、そこで培われた音楽性はその後、保育現場においてどのように磨かれていくのだろうか。

本研究では、発信的能力と応答的能力の両者を重視し、保育者の音楽表現に焦点を当てる。保育者養成課程（以下、養成課程とする）における学生の音楽的な表現に関する研究は散見されるが、養成課程における音楽的な経験が、実際に保育者となったときにどのように活かされるのか、その経験を基盤として、その後、保育者の音楽的な表現がどのように磨かれていくのか、またその際、養成課程以外での音楽経験はどのように影響するのかについては、検討の余地がある。そこで、本研究では、保育者の音楽表現が磨かれていくプロセスにおける、養成課程での音楽的な経験と保育者としての音楽表現の関連性について検討することを目的とする。

なお、本稿の第1章および、第4章～第5章は川見が、第2章と第3章は峯村が執筆を担当する。

## 2. 研究方法

### 2. 1. 調査方法

本研究では、上記の目的のために調査票調査を行った。具体的には、アイブリッジ(株)の「Freeasy」を利用したインターネット上での

Web調査を実施した。

### 2. 2. 調査の流れと対象者

調査には二段抽出法を用い、スクリーニング調査、本調査の順に行った。スクリーニング調査は、2023年8月上旬に行った。「Freeasy」が提供するターゲット情報から、全国、26歳～40歳以下の男女、業種として「医療・福祉職」、「教育職」で登録されるモニターに、後述する職業などを問う調査を、回答が5000件に到達するまで行った。当該年齢幅としたのは、一定の経験年数がある保育者を対象に調査分析をするためである。

本調査は、2023年8月下旬に行った。スクリーニング調査の結果、対象年齢を絞っても十分な回答数を得られる見込みであったことから、養成課程での音楽的な経験についての記憶がより新しいと考えることができる26歳～35歳で、最終学歴を「専門学校卒業」、「短期大学卒業」、「大学卒業」、「大学院修了」と答え、かつ現在の職業が「保育士」ないしは「幼稚園教諭」と回答した人を対象に調査を行った。調査への回答が120件に到達するまで本調査は実施した。なお、回答者の年齢はモニター属性情報として提供を受けた。

### 2. 3. 調査内容

まず、スクリーニング調査では、現在の職業、最終学歴、現在就いている職業（同一業種の場合は通算）の勤続年数、そして、田中（2020）に依拠し、音楽に関する習い事経験の有無を聞いた<sup>6)</sup>。

本調査では、大学や短期大学、専門学校での音楽的な経験について、田崎（2015）に依拠して聞き（計13問、十分に経験した、少し経験した、あまり経験していない、経験していない、養成課程に通っていない、の5件法）、「保育者としての自分自身の表現に対する自信がある」（とてもそう思う、まあそう思う、あまりそう思わない、そう思わない、の4件法）、自由記述で回答を求めたものとして、後述する過去の音楽的な経験等、保育現場に出た際に音楽表現に関して抵抗を感じたことや困ったこと、部活動経験の有無を聞いた。

## 2. 4. 倫理的配慮

インターネット調査は、氏名・住所等の個人情報無記名とする方法で行われ、モニターは、アンケートの目的と個人の名前・住所等の個人情報が研究者に提供されない旨の説明を受け、「引き続きアンケートにご協力頂けますか」という設問による同意を確認のうえで回答した。また調査には自由意志によって参加され、「アンケート完了」ボタンをクリックして回答データを送信するまでは、いつでも回答を止めることができること、想定される回答時間、調査内容等を明示したうえで実施した。

## 2. 5. 分析方法

自由記述以外の量的な集計や計量的分析は、SPSS 27.0にて分析を行った。自由記述で聞いた部分については、実際の回答を複数の研究者らでアフターコーディングしたうえで、内容分析を行った。量的な集計や計量分析の結果は第3章で、自由記述で聞いた部分についての分析の結果は第4章で述べる。

## 3. 保育者の音楽表現に対する自信と過去の音楽的な経験の関係

本章では、主に自由記述部分以外の量的な集計と計量的分析を行う。まずは、アンケート回答者の属性や回答結果の記述統計を示す。そのうえで、目的とした「養成課程における音楽的な経験が、実際に保育者となったときの音楽表現にどのように活かされるのか」、「養成課程以外での音楽経験はどのように保育者の音楽表現に影響するのか」について、検討をする。調査票調査では、実際の行動を観測できないので、活かされているのか、影響しているかどうかを調査することは難しい。そこで、「ある行動を遂行することができる」と自分の可能性を認識していること」を自己効力感と呼ぶ（Bandura, 1995）が、この自己効力理論に従い、音楽表現に対する自己効力（自信）の程度と、養成課程における音楽的な経験や、養成課程以外での音楽経験の関係を見ることとした。自己効力が高ければ、実際に音楽表現に対する行動が適切に遂行されているだろうという推定の上で、考察を試みる。

## 3. 1. 記述統計

本調査は予定通り120件の回答が得られるまで行った。ただし、回答の全てが「1」であり、自由記述も「ああああ」であるなど、概ね正確な回答と思われえないものと、本研究では養成課程での経験について分析したいところ、「養成課程に通っていない」という回答であったものを除外し、合計110件を分析対象とした。回答者の割合は、男性が1.8%、女性が98.2%で、年代は、26歳～29歳が61.8%、30歳～35歳が38.2%であった。そして、現在就いている職業（同一業種の場合は通算）の勤続年数は、4年目～10年目という幅があり、7年目と8年目の回答者が全体の4割以上を占めていた。

表1に音楽に関する習い事経験の有無と、音楽に関する部活動・サークル経験の有無のクロス表を示す。音楽に関する習い事は、鍵盤楽器、弦楽器、管楽器、打楽器、声楽、合唱、ミュージカル、リトミックのいずれかを、習っていたことがあると回答した人の合計である。音楽に関する部活動・サークル経験の有無については、中学生の時、高校生の時、「大学生、短大生、専門学校生の時」のそれぞれについて部活動・サークルを自由記述で回答を求めた。そして、音楽に関連した記述である音楽部、吹奏楽部、合唱部、管弦楽団、弦楽部、軽音楽部（またはこれらサークル）と回答があったものを有りとし、中学生、高校生、「大学生、短大生、専門学生」いずれかで有りであった人の合計を音楽に関する部活動・サークル経験有りとした。習い事については、経験があると答えた人が84.5%で、保育者の8割以上は何かしら音楽に関する習い事経験があることがわかる。一方、部活動・サークルについては、経験があると答えた人が34.5%であり、保育者の3人に1人強に留まる。

表1. 音楽に関する経験の有無

		音楽系の部活動・サークル経験		
		有り	無し	合計
習い事の 経験	有り	36 32.7%	57 51.8%	93 84.5%
	無し	2 1.8%	15 13.6%	17 15.5%
合計		38 34.5%	72 65.5%	110 100.0%

表2に、「あなたは、次のことに対して、どの程度そう思いますか。『保育者』としての自分自身の音楽表現に自信がある』として4件法で聞いた回答の結果を示す。なお、「とてもそう思う」、「まあそう思う」が66件、60.0%、「あまりそう思わない」、「そう思わない」が44件、40%であり、概ね二分できることから、以後前者を「自信有り群」、後者を「自信無し群」として検定を行う。

表2. 保育者の音楽表現に対する自信の程度

	度数	割合
1 とてもそう思う	21	19.1%
2 まあそう思う	45	40.9%
3 あまりそう思わない	35	31.8%
4 そう思わない	9	8.2%
合計	110	100.0%

表3に田崎(2015)に依拠して、養成課程における音楽的な経験について聞いた結果を示す。なお、それぞれの設問は、「大学や短大、専門学校において、次のことはどのくらい経験しましたか」として聞いた。選択肢番号の1、2、3、4を順序尺度(スケール)として捉えた場合の平均値と標準偏差も併せて示す。具体的な設問の内容は、発信的能力の基盤となる(4)「子どもの表現に反応するための音楽的資源」に関する経験を、「1. 音楽に関する基礎知識の学習」「2. ピアノやエレクトーンなどの基礎的な演奏」「3. 歌の基礎的な歌唱」「4. ピアノやエレクトーン以外の楽器の基礎的な演奏」「5. いろいろな音や音楽を聴いたり、演奏する(いろいろな音や音楽に触れる)」とし、(5)「子どもの表現に方向性をもたせる力」に関する経験を、「6. どのように音楽活動を展開していくかという方向性を考えて、自身が活動を行う」「7. 自身が音楽活動を行う中で、一つの活動を『続ける』『やめる』『方向性を変える』などの判断をする」とし、(6)「子どもの表現を広げられる音楽的アイディア」に関する経験を、「8. その時々や状況に応じて、使用する音・音楽を選んで用いる」「9. その時々や状況に応じて、音・音楽にアレンジを加える」とした。そして、

表3. 養成課程での音楽的な経験

	選択肢を選んだ人数の割合(n=110)				スケールとした場合	
	1. 十分に経験した	2. 少し経験した	3. あまり経験していない	4. 経験していない	平均値(ave)	標準偏差
1. 音楽に関する基礎知識の学習	40.9%	43.6%	14.5%	0.9%	1.75	0.73
2. ピアノやエレクトーンなどの基礎的な演奏	45.5%	45.5%	8.2%	0.9%	1.65	0.67
3. 歌の基礎的な歌唱	30.9%	39.1%	20.0%	10.0%	2.09	0.95
4. ピアノやエレクトーン以外の楽器の基礎的な演奏	9.1%	39.1%	29.1%	22.7%	2.65	0.93
5. いろいろな音や音楽を聴いたり、演奏する(いろいろな音や音楽に触れる)	20.0%	47.3%	22.7%	10.0%	2.23	0.89
6. どのように音楽活動を展開していくかという方向性を考えて、自身が活動を行う	11.8%	36.4%	31.8%	20.0%	2.60	0.94
7. 自身が音楽活動を行う中で、一つの活動を「続ける」「やめる」「方向性を変える」などの判断をする	9.1%	35.5%	24.5%	30.9%	2.77	0.99
8. その時々や状況に応じて、使用する音・音楽を選んで用いる	12.7%	35.5%	32.7%	19.1%	2.58	0.94
9. その時々や状況に応じて、音・音楽にアレンジを加える	13.6%	32.7%	32.7%	20.9%	2.61	0.97
10. 相手の表現を感じ取る*	20.0%	40.9%	23.6%	15.5%	2.35	0.97
11. 相手の表現から、相手の気持ちを読み取る*	11.8%	44.5%	29.1%	14.5%	2.46	0.89
12. 相手の表現に対して、言葉で応答する	17.3%	38.2%	31.8%	12.7%	2.40	0.92
13. 相手の表現に対して、音・音楽で応答する	11.8%	39.1%	31.8%	17.3%	2.55	0.92

\*実際の選択肢は以下。

10: 相手の表現(身体の動き、息づかい、雰囲気、声や楽器の音色、リズム、ダイナミクス等)を感じ取る

11: 相手の表現(身体の動き、息づかい、雰囲気、声や楽器の音色、リズム、ダイナミクス等)から、相手の気持ち(もっとやりたい、もっとこうしたい、やりたくない、不安、あきてきたなど)を読み取る

応答的能力である(1)「子どもの状況とニーズを把握する力」に関する経験を、「10.相手の表現(身体の動き、息づかい、雰囲気、声や楽器の音色、リズム、ダイナミクス等)を感じ取る」、(2)「子どもの表現を直感的に受け取る力」に関する経験を「11.相手の表現(身体の動き、息づかい、雰囲気、声や楽器の音色、リズム、ダイナミクス等)から、相手の気持ち(もっとやりたい、もっとこうしたい、やりたくない、不安、あきてきたなど)を読み取る」、(3)「子どもの表現に、音楽的に反応する力」に関する経験を「13.相手の表現に対して、音・音楽で応答する」とし、その比較対象として「12.相手の表現に対して、言葉で応答する」を加えた。

平均値をみると、表3の項目1~3については、は平均値が低く、実際に選択肢「1.十分に経験した」、「2.少し経験した」の合計で、それぞれ70%以上となる。

一方で、項目4、6、7、8、9の5つについては、同じく「1.十分に経験した」、「2.少し経験した」の合計では50%に満たず、養成課程では十分な経験をしてきていないことがわかる。中でも、(5)「子どもの表現に方向性をもたせる力」に関する経験を問う項目6、7では、それぞれ「あまり経験していない」「経験していない」が3割を超えており、(6)「子どもの表現を広げられる音楽的アイディア」に関する経験を問う項目8、9でも、「あまり経験していない」が3割を超えていることから、自らが他者の表現を引き出し、発展させていくような経験が養成課程では特に不足しているといえる。本調査から、田崎(2015)が述べるように、「(4)「子どもの表現に反応するための音楽的資源」に関する指導が養成課程で中心的になされていることに加え、応答的能力((1)~(3))に関する経験を約半数はしていること、自らが他者の表現を引き出し、発展させていくような経験が不足していることが明らかになった。

### 3. 2. 音楽表現に対する自信の程度と音楽的な経験

本節では、前節で述べた音楽表現に対する自信の程を「自信有り群」と「自信無し群」の別

で、①音楽に関する習い事経験の有無、②音楽系の部活動・サークル経験の有無、③養成課程における音楽的な経験、の3つについて述べる。

#### 3. 2. 1. 音楽に関する習い事経験の有無

表4に音楽表現に対する自信の別と、音楽に関する習い事経験の有無のクロス集計表を示す。 $\chi^2$ 値は.186、 $p$ 値は*n.s.*で有意差は認められなかった。習い事の経験の有無は、保育者の音楽表現に対する自信の程度に影響は無い。

表4. 音楽に関する習い事経験の有無と音楽表現に対する自信の別

	習い事の経験		
	有り	無し	合計
自信あり群 (n=66)	83.3%	16.7%	100.0%
自信なし群 (n=44)	86.4%	13.6%	100.0%
合計 (n=110)	84.5%	15.5%	100.0%

#### 3.2.2. 音楽系の部活動・サークル経験の有無

表5に音楽表現に対する自信の別と、音楽系部活動・サークル経験の有無のクロス集計表を示す。 $\chi^2$ 値は6.439、 $p<.05$ で有意差が認められた。音楽系の部活動・サークル経験がある人の方が、保育者の表現に対する自信が有意に高くなるのが分かる。

表5. 音楽系部活動・サークル経験の有無と音楽表現に対する自信の別

	音楽系の部活動・サークル経験		
	有り	無し	合計
自信あり群 (n=66)	43.9%	56.1%	100.0%
自信なし群 (n=44)	20.5%	79.5%	100.0%
合計 (n=110)	34.5%	65.5%	100.0%

#### 3. 2. 3. 養成課程における音楽的な経験

表6に音楽表現に対する自信の別と、養成課程における音楽的な経験の程度それぞれについて行った、平均の差の検定(t検定)の結果を示

す。なお、平均値 (ave) は、先に示した結果の通り、値が低いほど経験している点、注意されたい。

結果を見ると、「2.ピアノやエレクトーンなどの基礎的な演奏」、「3.歌の基礎的な歌唱」は、養成課程で経験がどれだけあると感じているかと、保育者の表現に対する自信の程度との間に関係は無かったが、それ以外は全てについて、有意な差が認められた。保育者自身で完結するような音楽的能力をどれだけ養成課程で経験できたかということよりも、田崎 (2015) がいうような応答的な能力を含めて、幅広く経験があることが、保育者になってからの音楽表現に対する一定の自信につながっている可能性が示唆される。

### 3. 3. 小括

ここまで、量的な結果の記述統計と、音楽表現に対する自信の程度と音楽的な経験の関係についてみた。養成課程では、基礎的な演奏 (鍵盤楽器や歌唱) は、経験したと思っている割合が他の経験に比べて高く、一方で自信の程度と関係が無いことと、その他の経験が有意に自信の程度に関係があることを踏まえると、養成課程における多様な経験の重要性が示唆される。

Bandura (1995) の論に依拠すれば、こういった多様な経験と自信の涵養を通じて、保育者の音楽表現がより適切に遂行されていると考えることができる。

一方で、音楽系の部活・サークル経験も自信の程度と有意な関係があった。Bandura (1995) は自己効力を高めるためには制御経験 (成功体験) が積み重ねることが必要であることも述べている。部活・サークルでの表現に関する様々な成功体験も、自信につながっている可能性がある。あるいは、習い事の経験が自信の程度と有意な関係が無かったことを踏まえると、部活動・サークルは週あたりの日数、活動時間が長いことが予想され、日常生活の中で音楽することが習慣となっていることが、保育者としての表現に対する自信に繋がっている可能性もある。また、特にピアノの習い事においては、集団レッスンと個人レッスンがあり、年齢が上がるとともに個人レッスンとなっていく傾向があるため、自分ひとりで完結する音楽活動となるが、部活動やサークルでは、他者とともに音楽をし、他者とともに一つの音楽をつくりあげることになる。そのため、他者とともに音楽をするという経験が子どもたちとともに表現することへの自信に結びついていると考えるこ

表6. 音楽表現に対する自信の別と養成課程における音楽的経験の程度の平均の差の検定の結果

	自信有り群		自信無し群		t値
	ave	s.d.	ave	s.d.	
1. 音楽に関する基礎知識の学習	1.61	0.742	1.98	0.664	-2.74 **
2. ピアノやエレクトーンなどの基礎的な演奏	1.56	0.659	1.77	0.677	-1.64 n.s.
3. 歌の基礎的な歌唱	1.95	0.935	2.30	0.954	-1.86 n.s.
4. ピアノやエレクトーン以外の楽器の基礎的な演奏	2.42	0.946	3.00	0.807	-3.31 **
5. いろいろな音や音楽を聴いたり、演奏する (いろいろな音や音楽に触れる)	2.03	0.859	2.52	0.849	-2.96 **
6. どのように音楽活動を展開していくかという方向性を考えて、自身が活動を行う	2.30	0.894	3.05	0.834	-4.38 ***
7. 自身が音楽活動を行う中で、一つの活動を「続ける」「やめる」「方向性を変える」などの判断をする	2.44	0.930	3.27	0.872	-4.72 ***
8. その時々や状況に応じて、使用する音・音楽を選んで用いる	2.32	0.947	2.98	0.792	-3.95 ***
9. その時々や状況に応じて、音・音楽にアレンジを加える	2.29	0.907	3.09	0.858	-4.65 ***
10. 相手の表現を感じ取る	2.09	0.907	2.73	0.949	-3.54 **
11. 相手の表現から、相手の気持ちを読み取る	2.14	0.802	2.95	0.776	-5.31 ***
12. 相手の表現に対して、言葉で応答する	2.06	0.839	2.91	0.802	-5.29 ***
13. 相手の表現に対して、音・音楽で応答する	2.18	0.802	3.09	0.802	-5.83 ***

\*\*\* $p < .001$ 、\*\* $p < .01$

ともできる。そして、保護者の意向が強く反映される習い事と、本人の意志で行う部活動やサークルでは、その動機づけに差異があると捉えることもできる。どのような経験が積み重なり、自信につながるかは量的調査で明らかにすることには限界があるが、そのモデルを明らかにすることは今後の課題である。

#### 4. 保育者自身の音楽表現に対する困難と養成課程での音楽的な経験等

本章では、第2章3節で述べた調査内容のうち、自由記述で尋ねた「保育者として実際に現場に出た際に感じた音楽表現に関する抵抗や困難」と過去の音楽的な経験等について検討する。有効回答数110件から、「なし」や質問内容

に即していない回答を差し引いた件数をそれぞれの分析の対象とした<sup>7)</sup>。

##### 4. 1. 音楽表現に対する困難

まず、「保育者として実際に現場に出た際に感じた音楽表現に関する抵抗や困難」をコード化することで、その記述内容を捉えた(表7)。なお、複数の内容を含む記述に対しては、複数のコードを付した。

75件の記述から、「ピアノを弾くこと」「自身の練習」「人前での表現」「演奏指導、歌唱指導の方法」「歌うこと」「レパートリーの少なさ」「複数のことを同時に行うこと」の7のコードを生成した。

「ピアノを弾くこと」は、最も記述数が多かつ

表7. 音楽表現に関する抵抗や困難

コード	記述内容例 8
ピアノを弾くこと (17件)	ピアノが得意ではないので、ピアノを弾くことに抵抗がある
	苦手なピアノを無理矢理弾かされる
自身の練習 (9件)	子ども達に教えたい曲や、子ども達が歌いたい歌のピアノ練習が大変で困る
	ピアノを練習したくてもする時間がない
人前での表現 (8件)	先輩保育士の前で表現することの緊張と恥ずかしさ
	卒園式でピアノを弾くこと。子どもたちの前ではなく保護者もいるという環境に、すごく緊張した
演奏、歌唱の指導方法 (8件)	楽器の演奏方法を教えるのが難しい
	合奏の指導方法
歌うこと (7件)	歌 歌うことが苦手だから
	アカペラで歌う時に他の保育者と音程がずれる
レパートリーの少なさ (6件)	知らない歌が多い
	スキマ時間などにすぐに出来る音楽遊びのレパートリーがないので困った
複数のことを同時に行うこと (4件)	ピアノをひきながら、子どもへの指示や歌を歌ってなどが難しくなかなかうまくいかなかった
	ピアノを弾きながら子どもたちを見て楽しく歌うこと。弾き慣れてればいいが、苦手だとピアノで精一杯になってしまう。
その他 (17件)	園に楽器などが少ない
	ピアノが得意でない先生が、リズム感がなかったり、不協和音を弾いていても、それに合わせて子どもたちが歌わされていること

たコードであり、「ピアノが苦手なため、ピアノを弾くことに対抗があった」などから成る。「苦手」という言葉が記述中に頻出しており、自分自身が苦手だと感じていることを人前で行わなければならないことへの抵抗感が記述から窺える。「ピアノを弾くこと」は、(4)「子どもの表現に反応するための音楽的資源」に関する課題であるが、演奏技能にかかわらず、「苦手」であると感ずる要因についても検討する必要があると考える。

「自身の練習」は、「子ども達に教えたい曲や、子ども達が歌いたい歌のピアノ練習が大変で困る」などから成る。具体的には、ピアノの練習の大変さや練習時間をとることの困難さについて記述されており、これらは、保育者としての業務内容に関わる課題であると捉えることができる。

「人前での表現」は、「もともとピアノが得意ではない中保護者の前で弾かなくてはいけなかったこと」などから成る。ここでは、子どもたちの前だけではなく、先輩保育者や保護者などの前で演奏や歌唱を行うことについての困難が記述されており、緊張や抵抗の背景には、「ピアノが得意ではない中（得意ではないにも関わらず<sup>9)</sup>」といったような、音楽の技能（(4)「子どもの表現に反応するための音楽的資源」）に関する側面が含まれている場合があることがわかる。

「演奏指導、歌唱指導の方法」は、「楽器の演奏方法を教えるのが難しい」や「合唱を教える時に思う様に上手く教えられない」から成る。これは、(4)「子どもの表現に反応するための音楽的資源」を基盤として、発信的能力、応答的能力の両者と結びついた課題であるといえる。

「歌うこと」は、「自分の歌唱力の不十分さ」などから成る。音程や歌唱の能力に関する記述が主であり、(4)「子どもの表現に反応するための音楽的資源」に関する課題であるといえる。

「レパートリーの少なさ」は、「知らない歌が多い」などである。この困難は、(4)「子どもの表現に反応するための音楽的資源」だけでなく、(6)「子どもの表現を広げられる音楽的アイデア」とも結びついた課題である。

「複数のことを同時に行うこと」は、「ピアノをひきながら、子どもへの指示や歌を歌ってなどが難しくなかなかなかうまくいかなかった」などから成る。自分自身が演奏や歌唱を行いながら、子どもたちに指導を行うことの困難さが記述されており、こういった指導を行うためには、(4)「子どもの表現に反応するための音楽的資源」を基盤として、子どもたちの反応や表現を感受し、それに応答する力が必要となる。つまり、「複数のことを同時に行うこと」についての困難さは、発信的能力だけではなく、応答的能力とも結びついた課題であるといえる。

以上のように、保育者として実際に保育現場に出た際に、保育者は音楽表現に関する様々な抵抗や困難を感じていることが明らかになった。それらは、(4)「子どもの表現に反応するための音楽的資源」に関するものから、発信的能力、応答的能力の両者を必要とするものまで見られた。先述のように、養成課程においては、(4)「子どもの表現に反応するための音楽的資源」に当たる音楽的な知識や音楽のレパートリー、ピアノ・歌・楽器に基本的な演奏能力等が代表的に指導されてきたとされているが、保育者として実際に現場に出た際に、「ピアノを弾くこと」「歌うこと」「レパートリーの少なさ」に困難を感じている場合もあることがわかる。そのため、養成課程における実技に関する指導内容と実際の保育現場との間にギャップがあるのではないかと推察することもできる。

#### 4. 2. 養成課程における音楽的な経験

養成課程で求められる音楽的な経験について検討するために、過去の音楽的な経験等と「保育者として実際に現場に出た際に感じた音楽表現に関する抵抗や困難」から生成したコードを対照した。

過去の音楽的な経験等とは、具体的には、①「音楽表現に関することで、保育者になったときに、自分の人生において『やっておいてよかった』、『経験しておいてよかった』と感じたこと」、②「音楽表現に関することで、保育者になったときに、大学や短大、専門学校で『経験しておいてよかった』、『学んでおいてよかった』、と思ったこと」、③「音楽表現に関するこ



とで、保育者になってから、大学や短大、専門学校で、『もっとこんな経験をしておきたかった』、『もっとこんなことを学んでおきたかった』と思うこと、④「音楽表現に関することで、保育者として、今から学んでみたいと思うこと」の4点を指す。表8に、過去の音楽的な経験等について、記述数が多かった順に上位4項目を整理した<sup>10)</sup>。

表8. 過去の音楽的な経験等<sup>11)</sup>

	①人生において経験しておいてよかった	②養成課程において学んでおいてよかった	③養成課程でもっと学んでおきたかった	④今から学んでみたい
1	ピアノ(36)	ピアノ(33)	リトミック(18)	リトミック(31)
2	ピアノを習っていたこと(19)	リトミック(8)	ピアノ(11)	ピアノ(11)
3	吹奏楽部だったこと(6)	人前で演奏する、歌うこと(5)	様々な楽器に触れる、演奏する(6)	表現、表現力(3)
4	吹奏楽(4)	童謡、こどもの歌、手遊び(4)	歌唱指導、楽器・合奏指導(6)	楽器・合奏指導(3)

①人生において経験しておいてよかったこと、②養成課程において学んでおいてよかったことについての記述では、「ピアノ」(「ピアノを習っていたこと」も含め)が上位を占めており、「保育者として実際に現場に出た際に感じた音楽表現に関する抵抗や困難」として、最も記述数が多かったのが「ピアノを弾くこと」であったことから、ピアノの経験が実際に現場に出た際に重要となることがわかる。中には、②養成課程において学んでおいてよかったこととして「ピアノ」と記述しており、かつ、実際に現場に出た際に感じた抵抗や困難として「ピアノを弾くこと」への苦手意識を記述している保育者もあり、養成課程での経験がピアノに対する苦手意識とも結びついた経験である場合もあると捉えることもできる。

「人前での表現」についての抵抗や困難と関連して、②養成課程において学んでおいてよかったことについての記述に「人前で演奏する、歌うこと」がある。「人前で演奏する、歌うこと」についての抵抗は、経験を重ねることで

緩和、克服されていく部分があるため、養成課程では、集団で授業を行うという特性を活かし、互いに聴き合い、人前で表現する経験を重ねることが、保育者としての表現を培っていく上で重要であると捉えることができる。

「演奏指導、歌唱指導の方法」についての困難と関連して、③養成課程でもっと学んでおきたかったこととして、「歌唱指導や楽器、合奏指導」、「様々な楽器に触れる、演奏する」という記述がみられる。これらの記述は、②養成課程において学んでおいてよかったことにおいては見られず、また、第3章1節で述べたように「4.ピアノやエレクトーン以外の楽器の基礎的な演奏」については、「十分に経験した」「少し経験した」という回答の合計が50%に満たないことから、養成課程における楽器演奏やその基礎知識を学ぶ経験が不足していると捉えることができる。そのため、養成課程において、様々な楽器に触れ、自身が楽器演奏をする経験をもつとともに、その基礎知識を学ぶことが必要であるといえる。

ところで、表8から「リトミック」に対する期待の高さを窺うことができる。具体的には、②養成課程において学んでおいてよかったこととして「リトミック」が挙げられているのは8件のみであるが、③養成課程でもっと学んでおきたかったことには、18件、④今から学んでみたいことには、31件の記述があった。リトミックとは、スイスの作曲家、音楽教育家であるエミール・ジャック＝ダルクローズ(Emile, Jaques = Dalcroze 1865-1950)によって考案されたリズムの要素を中心として、音楽を身体の動きを通して教える教育法である。日本の幼児教育においては、1960年代以降にリトミックが普及した。しかし、その課題として、塩原(2009)は、リトミックと呼ばれている活動は、多種多様な方法論と活動内容が混在しており、教師が弾くピアノに合わせて子どもたちが動く活動と捉えられている場合もあると指摘しており、佐々木(2023)は、実践書も多数出版されているが、身体の動きを伴った音楽活動のみで、リトミックと冠する教育実践が多く見受けられるようになったと述べている。また、福嶋(2018)は、ダルクローズの理念を深く理解し、

リトミックを音楽教育の基礎から、ダンスや舞踊および体操等を含むそれぞれの芸術表現へと発展させていくための基礎として位置づけ、幼児教育に最もふさわしい内容と方法についての総合的な実践研究と基礎研究を進めていくことが、日本のリトミック教育における今日的課題であると述べている。つまり、日本においては、「リトミック」ということばは広く普及しているが、それらは必ずしもダルクローズの理念に基づく実践であるとはいえず、身体の動きを伴った音楽活動がリトミックであるなどという誤った理解が広まっていると捉えることができる。そのため、本アンケートで得られた回答である「リトミック」に対し、保育者が何を求めているのかを検討することが重要である。日本の幼児教育におけるリトミックの捉えられ方を踏まえると、音楽を子どもたちが身体で感じる、身体で表現する活動や即興性を伴った活動についての保育者の関心が高いのではないかと推察することができる。いずれにせよ、「リトミック」という保育者の回答は、発信的能力と応答的能力の両者を必要とするものを指しており、特に、(3)「子どもの表現に、音楽的に反応する力」や(6)「子どもの表現を広げられる音楽的アイディア」と強く結びついていると考える。

## 5. 考察

本研究では、保育者の養成課程での音楽的な経験と習い事や部活動、保育者としての音楽表現に対する自信の程度の結びつき、実際に保育者となった際の困難について検討した。これにより、養成課程での音楽的な経験は、「(4)「子どもの表現に反応するための音楽的資源」に関する経験が中心的であることに加え、本調査の対象となった保育者の約半数は応答的能力((1)~(3))に関する経験をしていること、自らが他者の表現を引き出し、発展させていくような経験((5)(6))が不足していることが明らかになった。そして、養成課程において70%以上が鍵盤楽器の基礎的な演奏や歌唱(4)を経験しているが、その経験は音楽的な表現に対する自信の程度とは関係が無く、その他の音楽的な経験が有意に自信の程度に関係があり、養成

課程における多様な音楽的な経験の必要性が示唆された。

また、音楽系の部活・サークル経験も自信の程度と有意な関係があり、音楽に関する習い事の経験は自信の程度と有意な関係がなかった。このことから、部活動・サークルは週あたりの日数、活動時間が長いことが予想され、これが習慣的に音楽に触れる機会となっており、そこでの経験から得られる音楽的な素地が、養成課程における音楽的経験の理解や技能の体得を媒介して、保育者としての表現に対する自信に繋がっている可能性もある。また、この有意差には、集団性や動機づけが関係していると捉えることもできる。しかし、そもそも習い事をしていないが自信がある人、部活動・サークル経験はないが自信がある人も一定数おり、本論で取り上げなかった多様な音楽的な経験が、保育者としての表現に対する自信にどうつながるかについては、今後検討の余地がある。

本研究では、保育者として現場に出た際の音楽表現に関する困難として、「ピアノを弾くこと」「自身の練習」「人前での表現」「演奏指導、歌唱指導の方法」「歌うこと」「レパートリーの少なさ」「複数のことを同時に行うこと」の7点が見出された。そして、養成課程で必要なこととして、①ピアノの指導において、演奏技能にかかわらず、「苦手」であると感じる要因についても配慮、検討すること、②集団で授業を行うという特性を活かし、互いに聴き合い、人前で表現する経験を重ねること、③楽器や発声についての基礎知識を得るとともに、楽器に触れる経験や演奏経験をもつことの3点が見出された。①については、具体的には苦手意識を生まないこと、苦手意識をやわらげるような配慮が必要であり、そのために、スモールステップで「できた」という経験を重ねること、他者と比較するのではなく自分自身の上達を捉えられるよう、自身の練習や演奏に対する省察の機会を設けることが重要であると考えられる。

以上から、養成課程という限られた時間の中で、多様な音楽的な経験を重ね、発信的能力と応答的能力の両者をバランスよく培っていくこと、習慣的に音楽する機会、音楽することを生活の中におくことの重要性が見出された。保育

者の音楽的な表現が磨かれていくプロセスについて、そのライフストーリーを辿ることで縦断的に検討することは、今後の課題とする。

### 【脚注】

- 1) 保育の音楽的活動の場において、保育者が説明、発問、指示等を行う際に使う音楽的能力（田崎，2015，p.8）
- 2) 保育の音楽的活動の場において、子どもの表情、行動、表現等を瞬時に感じ取り、それに対して肯定、同意、展開、制止、反復、転換等の応答をするために使う音楽的能力（田崎，2015，p.8）
- 3) 田崎（2015）は、「音楽性」を資質・能力を示す言葉として用いていると捉えることができる。また、今川（2015）は、「musicality（音楽性）」を「人が生まれながらにもち、生涯にわたる世界との動的な関わり合いを支える資質の源」として捉えている。
- 4) ①～⑥の番号は、内容を整理するために筆者が付したものである。田崎（2015）は、6つの能力を図示しており、「保育者に必要な音楽性」を中心としてそれを取り囲むように6つの能力を配置している。
- 5) 本研究においては、歌唱や演奏だけではなく、音楽とともに踊るなどの身体表現や声で遊ぶ、環境音に耳をすませるなど、原初的な経験も含めて、音や音楽と関わる経験を広く示すために、「音楽的な経験」という言葉を用いる。
- 6) 田中（2020）による短期大学の養成課程の学生137名を対象とした「音楽に関わる習い事の実験」の関する調査では、全130件の記述のうち、ピアノが90件、エレクトーンが12件、和太鼓が4件、サクソ、バイオリン、トランペット、ゴスペル、声楽、篠笛、琴、三味線、リトミックが各1件、ダンスが12件、バレエが3件であったとしている。これに基づき、本研究では、調査項目を①鍵盤楽器、②弦楽器、③管楽器、④打楽器、⑤声楽、⑥合唱、⑦リトミック、⑧ミュージカル、⑨バレエ、⑩ダンスとした。
- 7) 有効回答数110件のうち、保育士が95件、幼稚園教諭が15件であった。本研究では、保育士と幼稚園教諭の割合について統制を行っていないため、両者への調査結果の差異については考慮しない。

8) 以降、アンケート回答は原文ママ掲載する。明らかに誤字、脱字等があった場合のみ、筆者らで修正を行っている。記述に複数の要素を含む場合には、該当する部分のみを抜粋して掲載している。

9) ( ) 内は筆者らによる。

10) 上位5項目以降、同数の記述が複数みられたことから、上位4位までを掲載した。

11) ( ) 内は件数を示す。

### 【引用・参考文献】

- Bandura, A. (1995). *Self-efficacy in changing societies*. Cambridge University Press.
- 福嶋省吾（2018）. 「ジャック＝ダルクローズの音楽教育」『最新・幼児の音楽教育』朝日出版社，pp.68-72
- 今川恭子・石川眞佐江・志民一成ほか（2015）. 「それって音楽性？一人・音・環境の動的関係性を調律するmusicalityは資質を支える概念かー」『音楽教育学』第45巻第2号，pp.79-83
- 川見夕貴・峯村恒平（2023）. 「保育者の音楽的な表現が子どもの音楽的な表現に与える影響」『目白大学総合科学研究』第19号，pp.25-35
- 香曾我部琢（2013）. 「保育者の転機の語りにおける自己形成プロセス—展望の形成とその共有化に着目して」『保育学研究』第51巻第1号，pp.117-130
- 根津知佳子・川見夕貴・和田朝美（2021）. 「音楽療法的アプローチの可能性と課題」『日本女子大学紀要家政学部』第68号，pp.27-36
- 佐々木由喜子（2023）. 「リトミックのリズム運動に関する一考察—『La Rythmique』の分析を通して—」『宮崎学園短期大学紀要』第15号，pp.11-22
- 塩原麻里（2009）. 「ジャック＝ダルクローズのリトミック」『音楽教育実践ジャーナル』第6巻第2号，pp.55-62
- 田中知子（2020）. 「保育者養成校に学ぶ学生の音楽経験に関する実態調査：創造的な音楽活動における学びの接続に着目して」『龍谷紀要』第41巻第2号，pp.185-199
- 田崎教子（2015）. 「音楽的活動における保育者の発信的・応答的能力の向上—クリニカル・ミュージシャンシップ援用の可能性」，東京藝術大学博士論文